

# 健闘するスペイン語

宇佐見 耕一

## ●はじめに

スペイン語は、スペイン本国とブラジルを除くラテンアメリカの大部分の国で公用語として話され、またラテンアメリカからアメリカ合衆国に移住したヒスパニック系住民も使用している。スペイン語を話す人口は約四億人といわれ、これは中国語、英語やヒンディー語と並ぶ有数の人口規模である。地域的にもスペイン語使用地域はアメリカ大陸がほぼカバーされており、人口規模からも、また地域的広がりからもグローバル化した世界における有力な言語のひとつと位置づけられる。他方、英語がリンガフランカ（世界共通語）となっている現在、その中心であるアメリカ合衆国に隣接するラテンアメリカでは、経済はもろろん学術面でもその影響はことさらに強い。そのような中で、高等教育や学術

研究面において独自の地位を保つスペイン語圏について紹介する。

## ●多様なスペイン語

スペイン語には方言が多く、本国スペインの標準語は首都マドリッドを中心としたカステイリヤ地方で話される言葉である。これに対してラテンアメリカで話されるスペイン語は、スペイン南部のアンダルシア地方の方言が基になっている、との説がある。そのためラテンアメリカで話されるスペイン語には、スペイン本国の標準語との間に文法や発音の差がある。たとえばスペイン語を標準スペイン語ではカステリヤノ(castellano)と発音するが、ラテンアメリカではカステジャノと発音する。また、カステイリヤ標準語にある二人称複数形がラテンアメリカのスペイン語には無

く、すべて三人称の複数形で話されるといった感じである。

こうした本国の標準スペイン語とラテンアメリカのスペイン語間の差異のみならず、ラテンアメリカ諸国間、また同一国内でも発音、イントネーション、また語彙に差異がある。たとえば、かつてアルゼンチン人は「ナポリの発音でスペイン語を話し、自分をイギリス人と思っているイタリア人である」と呼ばれたことがある。それほどブエノスアイレスを中心としたスペイン語にはイタリア語のアクセントが強く、また語彙も二人称が中世スペイン語の名残が残り、二人称の動詞の活用も現代スペイン語と異なる。こうした強いイタリア語風のアクセントにより、スペイン語圏において、アルゼンチン人は口を開けばたちどころにそのお里が認定されてしま

う。

アルゼンチンのスペイン語のほかにも、メキシコやキューバのスペイン語のイントネーションは独特であり、少しスペイン語になれば、外国人でも聞き分けることが容易である。また、語彙の地域差もあり、たとえばアルゼンチンのスペイン語にはアルゼンチン方言 (argentinismo) の辞書が存在している。そのなかでもブエノスアイレスのルンファルドとよばれる下町言葉は特別で、通常女性をムヘール (mujer) というところをヘルム (yemu) と逆転させて言う。こうした特殊な言い回しは、スペイン語を母語とする人々にとっても理解することが困難である。

## ●地域共通言語としてのスペイン語

国や地域によりこうした差異のあるスペイン語だが、地域的な特殊な用語を除いて話し言葉としてはほぼ完全に相互に理解可能である。そのため、テレビドラマや映画は吹き替えや字幕なしに約四億人を超える市場を有することになる。また、後に述べるように世界言語としての英語の影響力が強ま

の中で、アメリカ合衆国において膨大なスペイン語人口を抱え、しかも隣接地域に巨大なスペイン語圏が存在することから、アメリカ合衆国発のニュースも同時にスペイン語で放送される。その代表例はCNNスペイン語版であろう。これはスペイン語でセー・エネ・エネ・エン・エパニョール(CNN en Español)といい、アメリカ合衆国やラテンアメリカ諸国のニュースを衛星放送によりスペイン語で全世界に発信している。こほかにスペインの国営テレビである

テール・ペー(TV)も衛星放送により世界中にニュースやドラマ、映画を発信していた。TVは日本でも数年前まで視聴可能であったが、残念なことに採算ベースにのらず、その放映は中止された。

書き言葉としてのスペイン語は、話し言葉とは比較にならないほどに地域差は少なく、文学、学術書、ニュース等の書き言葉はスペイン語圏の人々には完全に共有されている。もちろん文学作品やニュースの中に地域特有の言い回しや表現があるが、こうした書き言葉上の差異は日本語の中にみられる地域的差異と本質的に異ならない。そのため、スペイン語圏の

大出版社二一世紀出版(Siglo XXI)のようにスペイン、メキシコおよびアルゼンチンに拠点を置くものもある一方、各国で出版された学術書、文学作品また雑誌類はスペイン語圏の大手書店で販売されている。

### ●英語の時代におけるスペイン語

英語の世紀で問題にされるのが高等教育や研究面で英語が主流となり、スペイン語による教育や出版が二流とみなされる事態が起きるのではないかということである。英語がリンガフランカであることは、アメリカ合衆国に隣接するラテンアメリカではことさら強く意識されている。初等教育や中等教育における英語とスペイン語のバイリンガル教育は中・高所得層には人気である。また、大学院レベルでアメリカに留学して学位をとり、学会、経済界また政界で活躍している人はきわめて多い。

そうした状況にも拘わらず、大学以上の高等教育はほぼ完全にスペイン語で行われている。社会科学部門ではラテンアメリカで最も権威があるとされるメキシコ大学院大学(El Colegio de México)

には、ラテンアメリカ中から留学生が集まってくるのをはじめ、メキシコシティにあるメキシコ国立自治大学やアルゼンチンのブエノスアイレス大学を始めとした主要国における有名大学にも自国学生のみならず、ラテンアメリカ各国から留学生がきている。また、チリのサンチアゴに本部を置く国連のラテンアメリカ・カリブ経済委員会(CEPAL)は、ラテンアメリカ地域の経済・社会問題研究に関して域内で大きな影響力を持っている。とくにスペイン語圏最大の人口を擁するメキシコの主要大学には、ラテンアメリカ各国から学生が集まり、また大学の教員や研究所研究員として他のラテンアメリカ諸国出身者が多数勤務している。

前述したようにラテンアメリカの出版物は、広大なスペイン語圏が対象となるため、スペイン語による有力な学術誌が存在する。たとえば社会科学全般を扱うブエノスアイレスの経済社会研究所(IDES: Instituto de Desarrollo Económico y Social)の発行する*Desarrollo Económico*、最近社会情勢の悪化により発行地をベネズエラのカラカスからブエノスアイ

レスに移したヌエヴァ・ソシエダ(Fundación Foro Nueva Sociedad)財団発行の*Nueva Sociedad*、経済・社会問題を扱うサンチアゴの国連ラテンアメリカ・カリブ経済委員会発行の*Revista de la CEPAL*などがある。これらの雑誌は著名な研究者により構成される編集委員会をもち、そこに論文は厳格な査読を経て掲載され、域内ではそれらの雑誌に論文が掲載されること

が、各研究者の業績として高い評価を受けることになる。

英語の時代は単に言葉の問題にとどまらず、社会科学の主要理論がアメリカ合衆国で生産され、その強い影響下に各国がおかれることも意味している。その点で現在のスペイン語圏も理論面においても英語圏の影響力下にあるといえる。とはいえ、ラテンアメリカ発の理論が少なからずあるのもスペイン語圏の特徴である。その代表例に挙げられるのが経済学における構造学派である。構造学派の形成は一九五〇年代におけるラテンアメリカのインフレに関する論争

が出发点となっている。マネタリストがインフレの原因を放漫な財政・金融政策による財政赤字であると説くのに対して、構造学派は

食糧供給の非弾力性、低い輸入能力、激しい階級対立また不平等な所得分配等の社会・経済的構造がその原因であるとする。(参考文献①)

つぎに、国連ラテンアメリカ・カリブ経済委員会の事務総長を務めたプレビッシュ(Raimo Prebisch)等による従属理論がある。プレビッシュは、工業製品を生産輸出する資本主義中心国と一次産品を生産輸出する周辺資本主義国では、技術進歩が中心国に有利に周辺諸国に不利に働き、周辺国の中心国との交易条件は悪化するとする。こうした周辺国の中心国への従属から脱却するために周辺国は工業化を進めるべきであるとして、輸入代替工業化政策を提唱した。プレビッシュ等のこうした議論は、ラテンアメリカ各国政府に大きな影響を与え、域内のほとんどの諸国で一九六〇年代から七〇年代にかけて輸入代替工業化政策が採用された。ちなみにプレビッシュ理論の集大成である周辺資本主義論(Capitalismo periferico)は、スペイン語版のみが発行され版を重ねている。

さらに、プレビッシュの従属理論にマルクス主義の不等価交換論を導入したフランク(Andre Gunder Frank)等による新従属学派がある。新従属学派によると、周辺国が発展するための処方箋は、中心国が支配する世界資本主義体制からの脱却であり、すなわちそれは社会主義革命であった。こうした新従属学派の政治的影響力は限定的であったが、左派系学者の間には大きな影響をもたらした。日本においても一九八〇年代を中心に新従属学派の学説が紹介され、それに基づく論文が執筆されている。しかし、一九九〇年代になるとラテンアメリカの多くの国で新自由主義にも基づく経済・社会政策が採用され、二一世紀になるとそれらへの反発から多数の国で左派政権が成立した。しかし、新自由主義に対抗する理論は残念ながらラテンアメリカからは発信されていない。

ラテンアメリカにおける学会の特徴としてフランスの影響が強い点も指摘しておかなければならない。スペイン語とフランス語の類似性や南米とヨーロッパの地理的近さから、ラテンアメリカの多くの学生がフランスに留学し、帰国して大学教員や研究員となっている。そのためにフランス発の理論であるレギュラシオン理論やフーコー主義等はラテンアメリカでも一定の影響力を保っていた。また、研究者のなかにはフランス語は話せるが英語は話せないというひとも少なからず見受けられた。

### ●域内のリンガフランカ・スペイン語

このようにスペイン語は英語の世紀においても、ラテンアメリカ地域における支配的言語として強固な地位を保っていることがわかる。他方、スペイン語が地域の支配的言語となったことは、スペイン語圏に存在している他の少数言語を圧迫していることにもなっている。スペイン本国ではフランコ独裁政権期に抑圧されていた地域言語のガリシア語やカタルーニャ語は復活の兆しが見え(参考文献②)、たとえばバルセロナ大学ではカタルーニャ語を使った授業が多く組まれている(参考文献③)。とはいえ、スペイン全体で見ると学界でのスペイン語の優位は揺らぎそうもない。ラテンアメリカでは、スペイン人による征服から今日に至るまで、多くの先住民言語が消滅し、あらゆる面におけるスペイン語の絶対的優位が確立している。先住民を多く抱えるメキシコやエクアドル等の高地諸国では、スペイン語と先住民言語とのバイリンガル教育が模索されている(参考文献④)。しかし、それは初等・中等教育に留まり、高等教育や学術研究面では植民地時代以来のスペイン語の覇権に揺るぎは見られない。

(うさみ こういち/アジア経済研究所ラテンアメリカ研究グループ)

#### 《参考文献》

- ① 西島章次「インフレーションと経済安定化政策」、小池洋一・西島章次編『ラテンアメリカの経済』、新評論、一九九三年、一一九―一三〇ページ。
- ② 梶茂樹・中島由美・林徹編『事典 世界のことば141』大修館書店、二〇〇九年。
- ③ <http://www.ub.edu/web/ub/es/index.html> 2010/5/24 閲覧。
- ④ 山崎眞次「ラテンアメリカの先住民言語…生き残りをかけて」、畑恵子・山崎眞次編『ラテンアメリカ世界のことばと文化』成文堂、二〇〇九年。